

しょうらい いえ 将来の家

ロドニーはうめき^{ごえ}声をあげながら、無造作^{むぞうさ}に鉛筆^{えんぴつ}で紙^{かみ}をつついていました。その後^{あと}、何とかしてやっと練習問題^{れんしゅうもんだい}を終わらせました。ロドニーは、かけ算^{かけざん}の九九^{きゅうきゅう}が大嫌い^{だいきら}いなのです。だからといってやらなければ、お母さん^{かあ}にしかられてしまいます。もう、むだにしている時間^{じかん}はありません。別に、いい成績^{せいせき}を取りたいわけではないのですが、翌日^{よくじつ}には算数^{さんすう}の小テスト^{しょう}もあります。一方、ロドニーが想像力^{いっぼう}と手先^{そうぞうりよく}の器用さ^{てさき}をく^くし^して作^{つく}っている帆船^{はんせん}の模型^{もけい}は、本^{ほん}だ^だな^なの上^{うえ}で未^み完^{かん}成^{せい}のま^まです。時^{とき}には気^きの滅^め入^いるような学校^{がっこう}の勉強^{べんきょう}が、どうして自分^{じぶん}の人生^{じんせい}でそれほど大切^{たいせつ}だとお母さん^{かあ}が思^{おも}っているのか、ロドニーには理解^{りかい}できませんでした！

ロドニーは3年生^{ねんせい}の時^{とき}、算数^{さんすう}と国語^{こくご}の成績^{せいせき}が良^よくありませんでした。それで、お母さん^{かあ}は、何とかしてロドニーが良^よい学習習慣^{がくしゅうしゅうかん}を身^みに付^つけられるよう、やる気^{やるき}を出^ださせようと決^{けつ}心^{しん}していました。4年生^{ねんせい}で、またしてもそんな悪^{わる}い成績^{せいせき}を取^とらないようにです。時には、大切^{たいせつ}な船^{ふね}をお母さん^{かあ}に一時^{いちじ}的に差^さし押^おさえられて腹^{はら}が立^たつこともありましたが、何も言^なわないほう^いが得策^{とくさく}だと分^わかっていました。イライラ感^{かん}をあらわにするには、ただむっつりしているだけのほう^{あんぜん}が安全^{おも}に思^{おも}えたからです。

最悪^{さいあく}なのは、成績^{せいせき}が良^よくないことに自分^{じぶん}でも腹^{はら}が立^たったことです。ロドニーは、別に両親^{りょうしん}や先生^{せんせい}をがっかりさせたいわけではなく、単^{たん}にやる気^{やるき}が出^でないだけなのです。船^{ふね}の模型^{もけい}のパーツとパーツをつなげるわくわくするような瞬間^{しゅんかん}の後^{あと}には必ず^{かなら}ず、宿題^{しゅくだい}をなまけたことで、はげしい罪悪感^{ざいあくかん}と先生^{せんせい}のしかめっ面^{つら}に直面^{ちよくめん}することになってしまいます。



時計をちらっと見ると、もう寝る時間になっていることに、いつになく喜びを
覚えました。ついに、勉強から解放されるのです！ 普段なら、夢中になって小さな
錨や船の回転部分を作ったりしているロドニーを模型から引き離し、明日も学校が
あるのだからと言って寝かせるのに、お母さんは苦勞していました。でも今日は、
もうお母さんは忍耐の限界に來ているので、もしすぐに寝ないなら、とても
やっかいなことになることは分かっています。だから、良い子になって、
言われなくてもちゃんとシャワーを浴び、寝る準備をしなければなりません。

くたびれて、今日起こったこともわすれてくると、ロドニーはいつの間にか、
ある大きな家の前に立っていました。おかしいことに、すべてが霧の中に包まれて
いて、その家がどんな家なのかは分かりませんでした。それがまだ建設中だとい
うことは分かりました。もっとよく見ようとして、ロドニーは家の周りを歩き
始めました。すると、レンガが抜け落ちている所が何か所かあるのに気が付いたの
です。その抜け落ちた部分のせいで、家の構造が不安定になっているんじゃない
かと非常に気になりました。一体どうして、だれもその穴をふさがらないので
しょうか？

未完成の大きな家の周りをぐるっと回った後、家からはなれようすると、
家のとなりにテレビのような大きなスクリーンがありました。最初見た時は何も
映っていませんでしたが、そばに寄ってみると、ピカピカの黒い画面に自分自身が
映し出されました。宿題をサボっているのがばれないように、算数の教科書を前に
置き、かくれてマストを船に接着剤で付けている自分を見ると、思わずはずかしく
なりました。それから、画面は建てかけの家の場面になりました。そして、家の
右側の壁から、また1つのレンガが落ちるのを見ると、ロドニーの顔は恐怖に
包まれました。実際の家の壁からもレンガが落ちたのかどうかを見ようと走り
寄ってみると、画面に映っていたのと同じ壁には、確かにレンガの抜け落ちた
穴が開いていました。

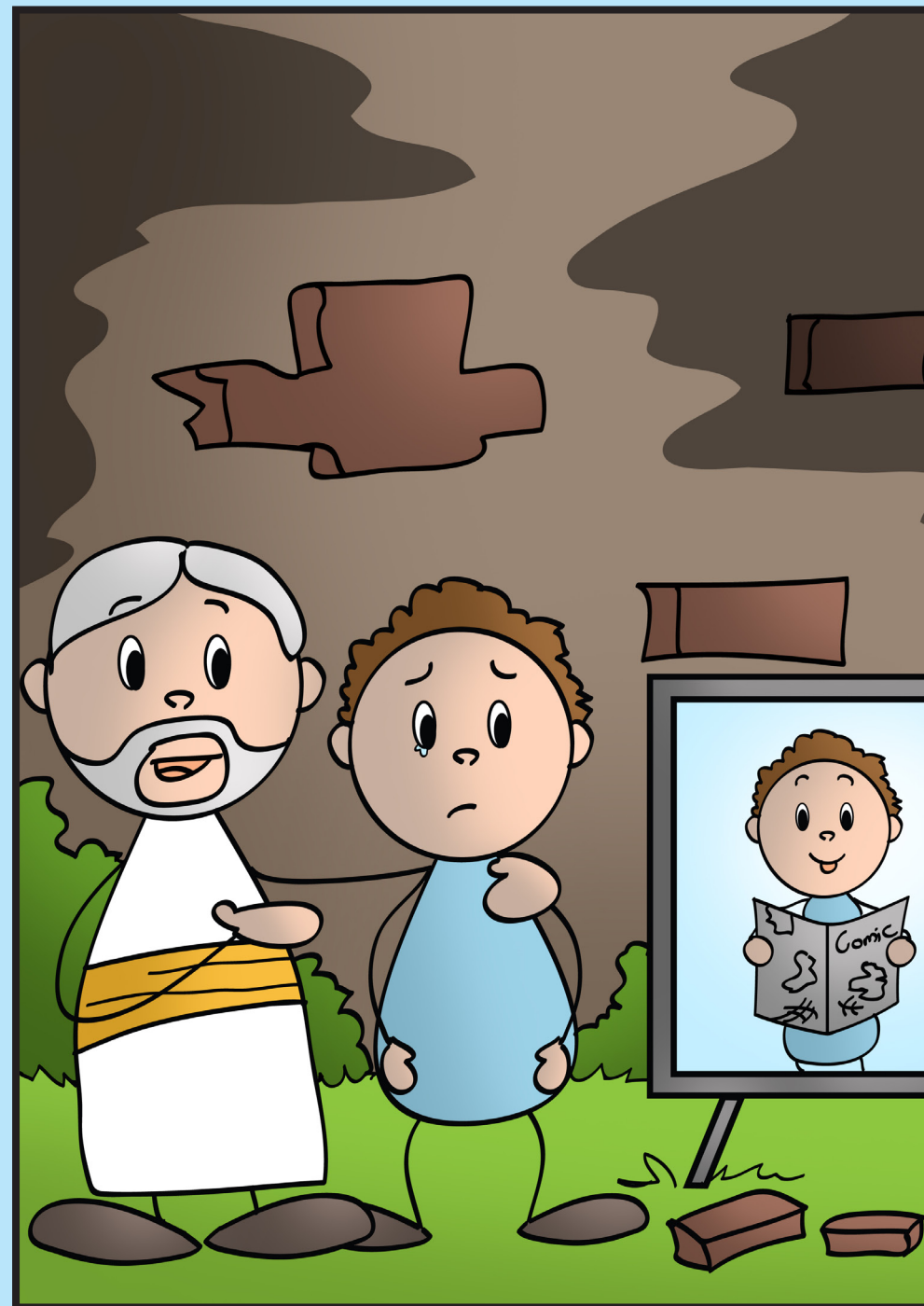


ロドニーがスクリーンの所に^{ところ}もどると、さっきの^{つづ}続きの^{えいぞう}映像が^{なが}流れました。
今度は、^{こんど}社会科の^{しゃかい}質問に^か対して^{しつもん}1パラグラフの^{たい}答えを^{ひと}書くことになっているのに、
マンガを^よ読んでいる^{ばめん}場面でした。すると、もう^{ひと}1つの^{いえ}レンガが^{はんたいがわ}家の反対側の^{かべ}壁から
お落ちました。ロドニーはそれを^み見て、全く^み身が凍るような^{こお}気が^きしました。もし
これが^{ほんとう}本当だったら^{どうしよう} どうしよう！（というのも、ロドニーにはすでに、^{じぶん}自分が
^か妄想現実か^{そうげんじつ}夢を^{ゆめ}見ているような、^み奇妙な^{きみょう}感覚が^{かんかく}あったからです。もちろん、これは
^{ゆめ}夢でしたが、本当に^{ほんとう}夢なのか^{ゆめ}どうか、^{はんしんはんぎ}半信半疑だったのです。）

ロドニーは、^{しゅくだい}宿題をする^か代わりに^{ほか}こっそり^{とき}他のことを^{とき}していた^{とき}時のことを
^{かぞ}数え上げ始めました。あの家から、^あ一体^{はじ}いくつの^{いえ}レンガが^{いったい}抜け落ちたのでしょうか？
^お落ちた^みレンガを^み見つけることはできるのでしょうか？^すおそ過ぎて^{いえ}家がくずれる
^{まえ}前に、^{あな}穴を^{あな}ふさぐことはできるのでしょうか？^{あな}ロドニーは、^{あな}穴に^て手を^つ突っ込んで、^こ
なみだを^ここらえながら、この^{いえ}ナゾめいた^{まわ}家の^{はし}周りを^{まわ}ぐるぐると^{はし}走り回りました。

すると、だれかの^{ちからづよ}力強い^て手が^{かた}ロドニーの^お肩に^お置かれました。ロドニーは^{いえ}家の
ことで^{あたま}頭が^あいっぱいだったので、^{ひめい}びっくりぎょうてんして^あ悲鳴を^あ上げました。
くると^ふ振り返って^{かえ}みると、^{しろ}白い^{ころも}衣に^{きんいろ}金色の^{おび}帯を^{はくはつ}しめた、^こ白髪で^{がら}小柄な^{おとこ}男の
^{ひと}人が^た立っていました。最初に^{さいしょ}見た^み印象は、^{いんしょう}天使^{てんし}なのでは、という^しものでしたが、
^{かれ}彼の^{こと}言葉から、^ばそうだと^わ分かりました。彼が^{かれ}ほほえんで、^いこう^い言ったからです。
^{わたし}「私は^{きみ}君の^{なに}ガイドだ。何が^し知りたいのかね？」

ロドニーが^{てんし}天使に^{つぎつぎ}次々と^{しつもん}質問を^あ浴びせる^{あいだ}間、^{てんし}天使は^{くち}口を^{くち}はさむことなく、
^{しんぼう}しんぼう強く^{みみ}耳を^あかたむけていました。その後、^{さいしょ}最初の^{しつもん}質問から^{こた}答え^{はじ}始めました。
「^{いえ}家が^{きり}霧に^{つづ}包まれているのは、それが^{きみ}君の^{しょうらい}将来の^{じんかく}人格を^{あらわ}表す^{いえ}家だからじゃ。
まだ^{さだ}定まっていないから、はっきりと^み見えないのだよ。大人^{おとな}になるまでに^いどんな
^{いえ}家になるかは、^{いま}今、^{きみ}君が^{まいにち}毎日^{くだ}下している^{ひと}1つ1つの^{けつだん}決断によって^き決まるのじゃ。

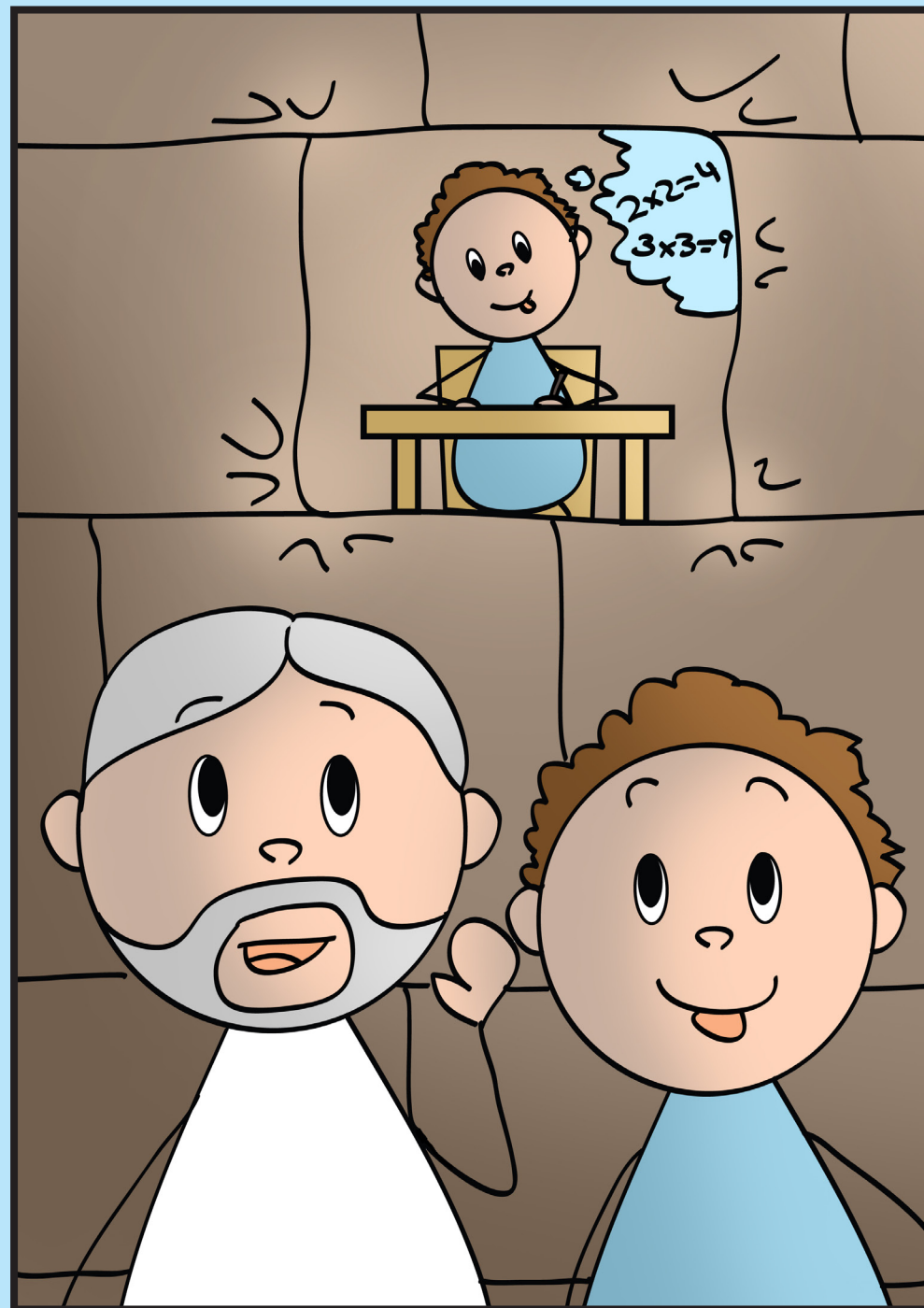


ただ、開いた穴はふさがることができるから、安心して。しなくてはならないことから気をそらす誘惑に抵抗するたびに、穴はふさがれ、家の構造にレンガが1つずつ増えていくのじゃ。君のお母さんがそれほども教育に力を入れるのは、君がよい成績を修めるのを望みからではなく、たとえ退屈でつまらないことであっても、必要なことはちゃんとするほどの自制心を備えた、強い意志を持つ大人になって欲しいからじゃ。

必要なことに集中できないと、人生で大切なことは決して成し遂げられない。だが、強い意志があれば、楽しいことでもそうでないことでも、やり抜くだけの意欲を持てる。日常のやるべきことは、ねばり強さと勤勉さを身に付けるための練習なんだと分かってくるだろう。」

天使が話したことについて考えようとしていると、ロドニーはいつの間にか、自分のお気に入りのイルカのベッドカバーの上に寝転がっていました。青いまくらは床に落ちていました。ロドニーはまくらを拾うと、自分にすべきことがあることをぼんやりと思い出しました。一生懸命考えましたが、思い出せるのは、船の模型に関係があるということだけでした。忘れてしまった夢を一生懸命思い出そうとして、ロドニーはまた眠りにつきました。

朝日が窓から差し込んできましたが、ロドニーは自分の見た夢が思い出せないままだったので、少しむくれていました。ベッドから起き上がり、むっつりとランドセルに手をのびした時、どういうわけか、ランドセルを見てうれしく思っている自分に気が付きました。忘れてしまった記憶がもどって来そうな気がしたからです。



いい においに ^{さそ}誘われて ^{かいだん}階段を ^お降りていくと、お母さんが ^{かあ}目玉焼きを ^め焼いて ^や焼いて
いました。ロドニーは ^{おも}思わず ^{いき}息を ^{おち}のんで ^いさげびました。「そうだよ、そうだ！
^{おも}思い出した！ ^だ夢を ^{おも}思い出したよ！ ^だレンガだ！ ^{きょう}今日は ^{あな}あの穴を ^ふふさがなくちゃ！」

「ロドニー！ ^{あさ}朝っぱらから ^ちわめき散らして、^{いったい}一体 ^{かあ}どうしたのよ？」お母さんは、
さっぱり ^わわけが ^わ分かりません。

「ごめん。お母さんを見て、^{かあ}大切な ^みことを ^{たいせつ}思い出したんだ。」そう ^い言って、
ロドニーは ^で出来立ての ^め目玉焼きが ^めのった ^さお皿を ^あつかみ、^{あさ}朝ご飯を ^{はん}ペロリと ^た食べて
しまいました。

かけ算の ^{さん}小テストを ^{しょう}コツコツと ^{あたま}やりながら、ロドニーの ^{なか}頭の中では、^{ちい}小さな ^{かず}数が
ビュンビュンと ^と飛び交っていました。^か学校へ ^{がっこう}行く ^い途中の ^{とちゅう}バスの ^{なか}中で、ロドニーは
以前 ^い何度も ^{ぜん}やったように、^{なん}小テストに ^ど備えて、^{しょう}一生懸命 ^{そな}最後の ^{いつしやうけんめい}復習を ^{さい}したのです。
ロドニーは ^{いま}今、^{さいしょ}最初から ^{せい}もっと ^いいい ^{おち}生徒に ^おなっていたらなあ ^{おも}と思っていました。
つめこみ勉強は ^{べんきやう}楽しく ^たありませんし、^{いそ}そんなに ^{べんきやう}急いで ^{べんきやう}勉強しようとしても、
すべてが ^{あたま}すぐ ^{はい}頭に入 ^{はい}る ^{はい}わけでは ^{はい}ないからです。

けれども、^{いちおう}一応は ^{ごうかく}合格した ^{しょう}小テストも ^{ふく}含めて、^ひその日の ^{じゆぎやう}授業が ^{すべ}全て ^お終わると、
ロドニーは、あることを ^{おち}はっと ^だ思い出しました。^{かれ}彼が ^{つく}作った ^{ちい}小さな ^{せんちやう}船長の ^{あたま}頭が
かたむいていた ^おことです。^おランドセルを ^お置くと、ロドニーは ^{ふね}船の ^{かんぱん}甲板から ^{せんちやう}船長を
と ^だ取り出し、^{まち}おかしい ^{ただ}間違いを ^{さぎやう}正すべく、^と作業に ^と取りかかりました。それから
^{いっとうこうかい}一等航海士と ^に二等航海士も ^に確認すると、^{かくにん}そちらも ^{あたま}頭が ^{あたま}かたむいていました。
すると、^あ開いた ^{まど}窓の外から ^{そと}風が ^{かぜ}吹き込んできて、^ふ船の ^こ帆を ^{ふね}乱しました。

これらの ^{てんけん}点検が ^{すべ}全て ^お終わって ^{とけい}時計を ^み見ると、もう ^{まるまる}丸々 ^{ぶん}10分が ^す過ぎていました。
その上 ^{うえ}ロドニーは、^{うえ}なぜか ^{うえ}なくなってしまった ^て手すりの ^{ちい}小さな ^{ちい}パーツの ^{ちい}ことで
^{あたま}頭がいっぱいでした。でも ^{かな}悲しい ^{よくじつ}ことに、^だ翌日 ^て出さなくては ^りならない ^か理科の ^{しゅくだい}宿題の
ことは、ロドニーの ^{あたま}頭の中 ^{なか}の ^{なか}やることリストには ^{かげ}影も ^{かたち}形も ^{かたち}ありませんでした。



すると、ろうかの 方から 足音が 聞こえてきたので、ロドニーは あわてて 理科の 教科書をつかみ、机の上に ドサッと 置きました。部屋の 前を 通り過ぎたのは お母さん でした。何か 考え事を しながら 自分の 部屋に 入って行ったようです。その時、例の 白い 衣に 金色の 帯を しめた、白髪で 小柄な 男の人の 姿が 頭の中を よぎりました。ロドニーは 絶望感に おそわれました。レンガが また 1つ、抜け落ちてしまう！ いや・・・そうは させないぞ！ まだ、この後の 午後と 夕方の 時間があるのですから。

ロドニーは 大きな 箱を出してきて、その中に そっと 船の 模型を 入れ、ふたを テープで しっかり 貼って、理科の 課題に 取りかかりました。算数の 小テストで 間違った 所も 復習して 直しました。宿題が 片付いて いくのは、とても いい 気分でした！

ロドニーが 社会の 教科書を出していると、携帯が 鳴りました。「やあ、ドナルド！」 今 船の 模型について 話している 時間がないことを、どうやったら やんわりと 伝えられるか、ロドニーは 考えていました。ドナルドは 近所の 友達で、ロドニー以上で ないにしても、同じくらい 船の 課題が 大好きなのです。

「客室を作る すごいアイデアがあるんだ。」 ドナルドは 興奮しながら 言いました。「うちに おいでよ。見せてあげるから。」

「ドナルド、本当に ごめんね。行きたいけど、まだ 宿題が 終わって ないんだ。」 ロドニーは、友達を がっかり させないように、勇気を ふりしぼり、ありったけの 言葉を 駆使して 答えました。

「そんなの、学校に 行く 途中に やれば いいじゃ ないか。来いよ、ロドニー。」

「ごめん、今 ちょっと 忙しいんだ。」 ロドニーの 指は、あの 楽しみが 入っている 禁断の 箱を 開けたくて たまりません。ロドニーは、家と レンガと 白い 衣を 着た 人の ことを、繰り返し 自分に 思い起こさせました。



「そんなにいい子ぶるなって。」 ドナルドはしつこく言ってきます。

「そんなら、いい子でもいいさ。」 ロドニーは不機嫌そうに言いました。
本当は、「ぼくを放っておいてよ。そうでないと、言い負かされそうだから！」と
言いたかっただけなのですが。

「ふん。」 ドナルドはうなり声を上げると、電話を切りました。

ロドニーは、仕方なく社会科の復習をしました。模型の船を作るのがクラス一
上手なドナルドと一っしょに見事な船の制作に取り組むことと比べたら、
教科書はたえがたいほど退屈に思えました。けれども、自分の将来の家は、
ちょっとした傑作よりも、はるかに大切なはずです。電話中に通りがかった
お母さんも、誇らしげにやさしくほほ笑んでくれました。

就寝時間になると、ロドニーはつかれて早く寝たい気分でした。目を閉じて
うとうとしていると、ガイドが自分にほほ笑みかけてくれているのを感じました。
自分の将来の家の壁の穴がまた1つふさがれたという喜びをかみしめながら、
ロドニーは眠りにつきました。その家は、きちんとがんじょうに建てられ、
将来を過ごすのに安全な家でなければいけません。ロドニーはその家を、
毎日毎日、レンガを1つ1つきちんと積み上げながら建てる決心をしたのでした。

